

高精度検査装置を独自の理論で開発

研究者から創業者へ

佐藤社長は、もともと「魔鏡」の研究者だった。大きくは光学、光源と反射の研究であり、光を金属に当て、反射する明暗を分析し、表面の凹凸を計測するというものだ。

創業する前はある企業に所属していた。企業の立ち上げから携わっていたが、経営も軌道に乗り始め、そろそろ違う道をと模索していた時であった。

佐藤社長のところへ、前から面識のあったある商社トップから声がかかった。その内容は「ある大手メーカーに検査装置を導入するはずであったが、以前に導入した際の検収結果が悪く、困っている。替わりの良い製品を探しているが、なかなか見つからない。起業して検査装置の開発をやってくれないか。」と言うものだった。佐藤社長はこの話を承諾し、創業を決意した。

開発は想像以上に難しいものであった。「魔鏡」の理論を応用し、試行錯誤を重ねた。その結果、ついに製品が完成した。導入先の大手メーカーにも非常に高く評価していただいた。



AYA-40VL2
ライセンスカメラ用 12bit 分解の高性能画像処理装置



MIL-21A
エリアセンサーカメラ用リアルタイム画像処理装置



積極的な技術開発

創業後は営業活動をほとんどしなかった。その代わりに「画像センシング展」「画像機器展」の展示会には毎年出展している。そこで市場のニーズを把握しながら、製品開発を行っていった。創業後2年目から、新たな製品を開発し、売上高は毎年安定している。特に3年目には、容器・金属の検査装置を開発するなど、開発に力を入れていった。大手医薬品メーカーと連携し、共同開発した製品を医薬品容器メーカーに販売していった。このように創業から現在に至るまで、半導体関係から、医療品、包装品、硝子関係などと、矢継ぎ早に新たな製品を開発していった。佐藤社長は「検査の基本的技術の原理原則はどんなものが対象となっても変わりません。当社は、目視が出来ない微細な検査を自動で行うことを売りとしています。そのニーズがあるところなら、どのような業界でもかまいません。」という。

現在、当社・回路設計業者・機械業者・鍍金塗装業者・商社の5社で連携を図り、新たな製品を開発している。それについては、来年に経済産業省の新連携事業として認定申請する予定だ。今後も積極的に新たな取り組みを行っていくつもりだ。

企業概要

(株)エム・アイ・エル

東京都国分寺市西町 2-2-3 第 5 東財ビル 2F

URL: <http://www.mil-mail.co.jp/>

代表取締役 佐藤 茂

資本金 6,700 万円

業種 精密機械器具製造業

主要製品 高精度欠陥検出画像処理装置



公社主催新技術・新工法展示商談会（トヨタ自動車）に出展

公的機関の利用による信用力の向上

(株)エム・アイ・エルは、平成 13 年からほぼ毎年、中小企業新事業活動促進法による経営革新計画の承認など、公的機関の何らかの認定を受けている。佐藤社長は言う。「公的機関の認定に関して、金融機関など特に保証協会からの評価は非常に高いものとなっています。認定を取得した企業に対しては与信が増加しますし、必然的に金融機関からの与信も増えることとなります。当社は開発力を売りにしている企業ですが、開発や研究費が逼迫しているような状況では、顧客のニーズに柔軟に対応することが難しくなってしまう

す。顧客からはいろいろなデータを要求されますが、余裕がないとそれらに対応することが難しくなるからです。そういった理由から、与信が与えられることはサービス面を充実させることにつながります。また、認定をいただくと従業員のモチベーションも向上します。当社は大手と比較すると規模も小さいですが、それでも素晴らしい研究開発をしているのだという、外部からの評価を得ることは、従業員にとって誇りとなっているようです。」

また、ニューマーケット開拓支援事業を活用している利点として「大手企業に訪問する際に、公的機関からの評価があることで、一定の信用を得られていると思います。当社は、技術で勝負ができる土俵に上がりさえすれば、たとえ相手が大手企業でも負けないという自信があります。実際に、大手企業が受注に失敗した案件を当社が獲得したことは何度もあるのです。しかし、多くの場合その前に土俵に上がらせてくれないのが実情です。技術があるといっても、名もない中小企業が相手では警戒しているのでしょう。しかし、ニューマーケット開拓支援事業を活用すると、ビジネスナビゲータがその土俵に乗せてくれるのです。」

この土俵での連勝を期待したいものである。

ナビゲータの声

ある日、新製品の開発を行っている金属加工メーカーと(株)エム・アイ・エルとのマッチングを行った。金属加工メーカーは新製品の完成に集中しており、検査項目に関しては“ノーアイデア”の状態であった。

(株)エム・アイ・エルの社長と担当者は金属加工メーカーの新製品の用途及び発言内容を理解した。

次回の訪問の際に、具体的な検査項目及び検査機に関するアイデアを提出し、金属加工メーカーはこのアイデアを 100% 受け入れた。

検査機を使用する側に立っての提案は、検査に関する経験と技術力の裏付けである。

(株)エム・アイ・エルには今後も技術力を向上し、検査機を使用する側に立っての提案型営業に徹して欲しい。

企業の声

5年後の目標として、AI（人工知能）を備えた検査ロボットを開発したいと考えており、すでに AI の研究を始めています。日本のものづくりは今後、高性能・高品質に特化すべきだと考えています。安くてもよい製品は中国に任せておくべきです。中国の最近の成長は目覚ましいものがありますが、日本とは文化が違います。日本には高性能・高品質なものづくりの文化があります。どこにも作れないような製品を開発し製造していくべきです。それを実現するためには検査の精度が重要となってきます。当社は高性能検査装置により、日本のものづくりを支えていきたいと思っています。